慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	国際社会学の再検討
Sub Title	
Author	小井土, 彰宏(Koido, Akihiro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2010
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.15 (2010. 7) ,p.88- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集2: 「国際社会学」の到達点
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20100700-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 15 号（2010）

国際社会学の再検討

小井土　彰宏

国際社会学の専門領域として確立してから早 20 年、その制度化は進んだがいまだに不十分とも思える。その一方、今回のシンポジウムで、その中で学び成長した中堅・若手の研究者たちが、今日本の国際社会学のあり方を問い直す批判的眼差しは、この分野確立以前に出発した研究世代の一人として考えさせられる点も多い。まず、塩原氏は、現在の国際社会学的研究が、社会統合という概念を無批判に使用し、事実上「社会統合されるべき国民社会」を実体化し、無批判に想定している傾向があると指摘する。また、木村氏は、日本の国際社会学研究が周辺社会における国民社会自体を想定しえない錯綜した現実に対応していないとその視野の限界を批判する。

確かに、近年の在日外国人に関する政策課題に関して言えば、そのような語り口も散見されるのも事実だろう。しかし、日本における国際社会学の成立の在り方とそこを支えた視座構造を考え、そこからの展開を追うなら、それは一面的な判断とは言えないだろうか。

国際社会学の黎明期である 1970 年代後半、日本の社会学は未だに一国的な産業化のパラダイムに拘束されていた。そのことは国際的視野がなかったことを意味しない。この時期の日本の社会学の主要な国際的広がりでの関心は、国民国家の発展・変動の多様性を探る比較社会学的な研究であったといえよう。しかし、このような多数派に対して、津田塾大を拠点とした研究者集団、特にケベック問題に取り組んだ馬場伸也氏は、このような nation を自明視したアプローチからいち早く離脱していった。この馬場氏との交流の中で、小倉充夫、吉野耕作、伊藤るり、そして故・梶田孝道といったその後をリードしていく国際社会学者たちが自らの研究スタイルを形成してきた過去はある世代までにとっては常識に属する。もちろん、これらの社会学者の関係以前に、上智大学の故・鶴見和子をめぐるつながり、馬場氏と海外で影響を与えあった平野健一郎（政治学）、栗原彬（社会心理学）の間の共鳴関係など、多角的・領域横断的な社会的知のネットワークがあったことも忘れてはならない。これらの研究者にとって個別具体的な対象を超えて共通の課題だったのは、牢固とした国民国家の自明性からはみ出し続ける自らの関心対象をとらえるための新しい社会学の在り方だったということは疑う余地のない事実だ。小倉の南部アフリカ地域全体を一つの支配の体系として世界史的な視点からとらえその中での労働利用の構造を把握する視点、伊藤のブルターニュ問題からテクノクラティックな国民国家の支配による統合の限界を見つめる眼差し、平野の近代化エリートの中でのマージナルマン的な葛藤への着目など、一つの国家への統合では済まされない社会的な事象への痛烈な関心こそが、この分野を形成し、突き動かしてきた動因であった。

そして、これらの論者たちは、この 80 年代に入る時期の日本において進行する「国際化」の中で「単一民族国家」、「日本人としてのアイデンティティをまず確認するべし」といった支配的な言説にまずもって違和感を提起し、在日朝鮮・韓国人（まさに指紋押捺問題はこの時期に起こった）、北海道におけるアイヌ・ウタリの提起する先住民権、沖縄の投げかける多重的な周辺地域の困難など、日本国内に内在する異質性と差別の問題に関して強い関心を示していた。

その意味で、日本の国際社会学が統合される国民社会を暗黙裡に想定する傾向をもっているという見解は、この出発点とは決定的な隔たりを持つ。この逆説の背景の一つは、その後 1980 年代末以降明確に国際移民の流入が始まったことだろう。新たな異質性の奔流の中で元来内包してきた異質性が背景に退き、目の前の課題に研究者たちがかつて抱いた社会的な地場に対する痛切な違和感が薄れた可能性もあるだろう。

だが、私には、このギャップの理解には、むしろ制度化を遂げてきた国際社会学領域の知識社会学的な検討が必要と思える。第一に、国際社会学分野は、この急激な人の国際移動や企業・情報の移動という現実の変化を受けて、80 年代以降拡張していく。そこには、都市社会に参入してきた移民集団に新たな関心を高めた都市社会学者、多文化・多言語化に対応しきれない学校を検討する教育社会学者、各国研究の中でそれぞれの国の移民状況や移民政策に取り組む地域研究者等、多様な研究者たちがこの分野に参入し、急激な活況を呈した。翻ってみるなら、この急激な分野の膨張の結果、かつて黎明期にはあったあの国民国家の認識の鉄の檻との苦闘の中で形成された暗黙知が必ずしも共有され、接合されなくなったのではないか。

そして、もう一つの要因は、この分野の研究者自体の国際移動である。この領域では、必然的に研究者たちが、海外にかなりの長期間滞在する。かつて限られた研究者たちの特権だった留学も、90 年代に入ると奨学金や助成金の拡充によって拡大し、特にこの分野では有望な大学院生の多くが数年の留学を体験し、学位の取得なども以前より拡大してきた。研究者が世界的に移動し直接体験するというこの分野にとって望ましい変化は、国内的な研究の多元化を生み出し知的な豊饒化を促す一方で、時間的な縦の知的なつながりを以前に比べ困難にする一因となった。すなわち、先行する世代の抱えた課題とそれへの様々な格闘の軌跡と成果は、国際社会学のその後の展開において十分に共有はされなかったのではないか。この国際社会学の同時的な国際的な連動と国内的な縦の連続性の弱さは、丸山真男がかつて指摘したタコつぼ化した各専門分野が意外に国際的につながっているという日本的な知の構造の縮小された最新版とも言えるのではないか。もちろん、国際社会学の制度化はまだ日も浅い。それぞれの研究者を隔てる壁はさほど高くも、ぶ厚くもない。むしろ、この分野の黎明期の記憶の欠落は、若い研究者の参入と自由闊達な動きが縦の組織化の力を弱めるという好ましい結果の予期せざる副産物とも言えるだろう。

様々な専門性と多様な海外体験を持った新しい世代の参入を歓迎しながら、どのように黎明期が特有に持つあの豊かな可能性と葛藤について伝えるべきだろうか。絶えざる国際的な変動と国内の多文化的な複雑化が生み出す新しい課題に直面する中でも、その方法は模索する必要

はあるだろう。そのことは、さらに海外での留学、訓練、そしてフィールドワークや教授経験のある研究者を組み込みながら、どのようにこの分野を有機的に発展させていくかという具体的課題につながってくる。研究者養成の実践的な課題としては、海外留学経験者や日本への留学生の受け皿を単に作るだけでなく、その媒介をいかに柔軟に行っていくかといった未来志向の課題と表裏一体の問題ではないだろうか。様々な横と連携を図り、かつ時間軸の縦の系譜をつなぐ新たな交流の場を形成することが重要な課題である。まさに、回顧と展望と呼ぶにふさわしい貴重な再考察の機会をいただいたことを感謝したい。

（こいど　あきひろ　一橋大学）